

エナプター

日本事務所立ち上げも準備

エナプター(独ベルリン)は、特許を持つ独自の陰イオン交換膜(AEM)で水を素を製造する水電解装置の新型モデル「E.L. 2.1」を「第16回水素燃料電池展」で発表した。従来モデル比で消費エネルギーを8%削減、設置スペースを20%低減した。再生可能エネルギー由来電力を利用したグリーン水素としてエネルギー貯蔵、Power to X(電力の燃料化)などへの需要を見込む。標準価格は9000ユーロ。

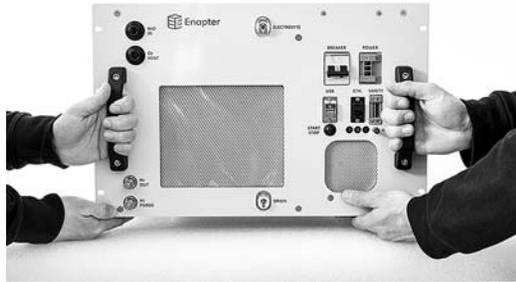
新製品は、貴金属を使わない独自AEM技術で高性能化、低コスト化を実現した。周辺補助機器を簡素化して小型化も達成した。水素製造能力は1kg/日、1000台で3万6500kg

水電解装置の新モデル発売

／年に達する。エネルギー効率は4.4kWh/Nm³、水素純度は99.95〜99.999%。3万時間以上という高い耐久性も持つ。

セバスチャン ユストゥ

ス・シユミットCEOは「イリジウム、プラチナ、チタンなどの貴金属ではなく、多彩でより安価な材料を使用できるのが特徴だ。日本の経済産業省は30年の



高エネルギー効率を実現した「E.L. 2.1」

ール寸法482W×594D×310mm、モジュール重量50kg。ソフトウェア制御によるエネルギーマネジメントシステム(EMS)を標準搭載し、同社専用クラウドを通じて産業グレードのセキュリティを実装して、高度な接続、監視・制御、データ解析、フロー管理を実現する。

用途はエネルギー貯蔵やPower to X、水素ステーション、マイクログリッドなど。太陽光や風力といった再生エネルギーを利用したグリーン水素としての売り込みもかける。これまでに29カ国で顧客89件に出荷実績を持つが、独ミュンスターでは燃料電池と組み合わせた家庭用エネルギー貯蔵に使われている。オランダ・ロッテルダムの集合住宅では暖房用のPower to Xに使用されている。グリーン水素でボイラーを稼働させるもので、CO₂発生量をゼロにする。

国内では5社以上に導入されており、そのうち数社は複数のシステムを採用しているリピーター。主にバックアップ電源、遠隔地・島嶼部のマイクログリッド、水素ステーションなどで使われている。経産省によると、17年の水素年間需要は200tだが、20年に4000t、30年には30万tまで増加し、長期的には500〜1000万tまで拡大すると予測している。

主な仕様は、最大圧力35bar、消費電力2.2kW、定格入力電圧AC200〜240V(50/60Hz)、モジュール

国内では5社以上に導入されており、そのうち数社は複数のシステムを採用しているリピーター。主にバックアップ電源、遠隔地・島嶼部のマイクログリッド、水素ステーションなどで使われている。経産省によると、17年の水素年間需要は200tだが、20年に4000t、30年には30万tまで増加し、長期的には500〜1000万tまで拡大すると予測している。

国内では5社以上に導入されており、そのうち数社は複数のシステムを採用しているリピーター。主にバックアップ電源、遠隔地・島嶼部のマイクログリッド、水素ステーションなどで使われている。経産省によると、17年の水素年間需要は200tだが、20年に4000t、30年には30万tまで増加し、長期的には500〜1000万tまで拡大すると予測している。

国内では5社以上に導入されており、そのうち数社は複数のシステムを採用しているリピーター。主にバックアップ電源、遠隔地・島嶼部のマイクログリッド、水素ステーションなどで使われている。経産省によると、17年の水素年間需要は200tだが、20年に4000t、30年には30万tまで増加し、長期的には500〜1000万tまで拡大すると予測している。

国内では5社以上に導入されており、そのうち数社は複数のシステムを採用しているリピーター。主にバックアップ電源、遠隔地・島嶼部のマイクログリッド、水素ステーションなどで使われている。経産省によると、17年の水素年間需要は200tだが、20年に4000t、30年には30万tまで増加し、長期的には500〜1000万tまで拡大すると予測している。

国内では5社以上に導入されており、そのうち数社は複数のシステムを採用しているリピーター。主にバックアップ電源、遠隔地・島嶼部のマイクログリッド、水素ステーションなどで使われている。経産省によると、17年の水素年間需要は200tだが、20年に4000t、30年には30万tまで増加し、長期的には500〜1000万tまで拡大すると予測している。

国内では5社以上に導入されており、そのうち数社は複数のシステムを採用しているリピーター。主にバックアップ電源、遠隔地・島嶼部のマイクログリッド、水素ステーションなどで使われている。経産省によると、17年の水素年間需要は200tだが、20年に4000t、30年には30万tまで増加し、長期的には500〜1000万tまで拡大すると予測している。

国内では5社以上に導入されており、そのうち数社は複数のシステムを採用しているリピーター。主にバックアップ電源、遠隔地・島嶼部のマイクログリッド、水素ステーションなどで使われている。経産省によると、17年の水素年間需要は200tだが、20年に4000t、30年には30万tまで増加し、長期的には500〜1000万tまで拡大すると予測している。

